萩原朔太郎の詩作における「言語感覚」と意義

―前期詩集『月に吠える』『青猫』から晩年の『氷島』へ―

冨永まゆ（お茶の水女子大学）

萩原朔太郎は、近代詩における口語自由詩の形成・発展に大きくかかわった人物として名高い。中でも「詩」と「音楽」との関係について、自身の詩作に反映させるほか、詩論やエッセイ、アフォリズムを多く残しており、彼が詩の「音楽性」を重要視していたことが窺える。このことから、現代の研究において、詩の多様な「音楽性」の要素の指摘が行われているが、その全体を統括的に扱ったものは少なく、言及の余地があるのではないか。

上記の問題意識をふまえ、前期詩集『月に吠える』『青猫』から任意の詩を選択し、その「音楽性」を要素ごとに指摘した上で、両詩集間における朔太郎詩の「音楽性」の変遷あるいは一貫性について考察する。また、そこから得られる「音楽性」の傾向、すなわち朔太郎の「言語感覚」をもとに、当時における朔太郎詩の意義も明らかにする。本発表では、これらの考察の結果と、そこから晩年の詩集『氷島』に向けてどのように研究を発展させていくかについて報告する。

まず、先行研究や朔太郎の詩論等を参考に、詩の「音楽性」を聴覚的な要素から連想を伴う多義的なものまで 5 つのレベルに分類し、任意に選択した詩においてそれぞれどのように用いられているかを指摘した。その結果、両詩集の共通点と相違点が明らかになった。

共通点として挙げられるのは「聴覚的なものから多義的なものまで幅広い「音楽性」が実践されている」「口語自由詩という形式でありながら、口語・文語の「音楽性」を活かし、一要素として還元させている」という 2 点である。一方、相違点として、『月に吠える』時点では、聴覚的な要素の傾向が強いのに対し、『青猫』ではそれに加えて多義的な「音楽性」も顕著になる。また、『青猫』では、朔太郎の「音楽性」に対する理解がすすみ、自身の意向にあわせて厳選された要素を用いていると考えられる傾向も確認された。以上に基づき、「音楽性」や口語・文語の問題に対する朔太郎の積極性という一貫性と、その追及の中で自身の中の「音楽性」を確立していく変遷が見て取れるであろう。さらに、口語・文語の双方を「音楽性」という観点のもとで用いることで、当時における内面の発露を目的とした「言文一致的意義」に加え、口語・文語が「音楽性」の要素として効果的に用いることができるという「言語感覚的意義」をも、朔太郎詩にはあるのだといえる。

これをふまえて、晩年の文語詩集『氷島』について考えると、ひとことで「口語から文語へと回帰した」とはいえまい。前期詩集からの流れをたどり、詩作全体を俯瞰することで、口語から文語への転換には朔太郎による詩の「音楽性」の追求が前提にあると考えられるのではないか。また、朔太郎の詩観を理論と実作の両側から検討することで、理論の実践を確認するとともに、実作を通じて理論の解釈を深めることが期待できる。